兵庫

H27.11.17

Dr.和の町医者日記

「がんの基礎知識」シリーズ⑫

がん専門医とかかりつけ医

病院と開業医の併診

インフルエンザの予防接種の季節になりました。今年のワクチンは、例年と少し異なるため、自己負担が値上がりしたところが多いようです。高齢者や、がんや糖尿病などをお持ちの方はそろそろ打たれた方がいいでしょう。

さて今回は、がん専門医とかかりつけ医の関係についてお話しましょう。がん専門の病院で、手術や抗がん剤、放射線などのがん医療を受けている方がたくさんおられます。

がん治療中の方が風邪をひいたとき、どうされていますか。抗がん剤の副作用で、ご飯が食べられなくなったときは、がん専門病院を受診されますか。

そういった場合、近くのかかりつけ医に対応してもらった方が便利なことが多いです。別の医師にかかると〝浮気した〟と思われるのを嫌い、遠くの病院までタクシーや救急車で行く方がよくおられますが、合理的ではありません。風邪や食欲不振なら、近くのかかりつけ医にお願いしましょう。

また、ワクチンの接種や要介護意見書の依頼も同様です。病院と開業医の併診は全く問題ありません。

がん専門医とかかりつけ医は、患者さんが想像する以上に普段から情報交換をしています。大きな病院と開業医の合同勉強会が随時開催され、相互理解を深めています。

心臓病や肝臓病、糖尿病では「連携パス」という共通の連絡帳を用いて、情報を共有しようというシステムが年々盛んになっています。インターネットを用いた連携も進められています。

がんに関しても「がん連携パス」というものがあります。経口抗がん剤を服用中の患者さんの副作用チェックを近所の診療所で行うというケースも増えています。大きな病院は手術や診療などで多忙です。もし、軽微な症状と思われるのであれば、まずは近くのかかりつけ医で診てもらった方がお得だと思います。

一方、がん療養中の方が痛みに悩まされる場合があります。開業医にはモルヒネの知識などないだろうと思っている方も多いようですが、国の指導もあり、がん診療に携わる開業医には、緩和医療に関する重厚な講習会が定期的に開催されています。

がんの痛みは日々刻々と変化するものです。大病院だと、次回の受診日が1カ月先なんてこともあります。そんな場合は、緩和医療に熱心なかかりつけ医を受診してください。よく分からない場合は、かかりつけ医に直接「先生はモルヒネの処方ができますか」と聞いてみてください。

モルヒネを処方するには麻薬処方の免許が必要です。免許がある開業医と免許がない開業医がいて、医者なら誰でも処方できるわけではありません。がんの痛みは我慢してはいけません。

がんの痛みかどうか分からないときも、かかりつけ医にまず相談してください。かなり状態が悪い人なら、往診もしてくれる近所の開業医をかかりつけ医にしておいた方が便利でしょう。

「どうすれば、いいかかりつけ医が見つかるか」という質問をよくいただきます。まずは家から近いこと。そして「かかりつけ医になってくれますか」「痛みの治療もしてもらえますか」と直接、聞いてください。その医師と相性が合うと思うなら、その瞬間からあなたのかかりつけ医です。かかりつけ医はがん治療の主治医と同様、あなた自身が選ぶものです。

緩和医療　痛みには4種類ある。肉体的、精神的、社会的、そして魂の痛み（スピリチュアル・ペイン）。これらはまとめてトータル・ペインと呼ばれ、薬剤や薬剤以外の方法で痛みを和らげる医療をいう。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「置ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。57歳。